氏名：佐々木太郎

論文題目：国際政治の見失われた次元

—対外政治工作の一類型としてのソ連の「影響力」工作—

（論文内容の要約）

本学位申請論文は、序章と終章（結論）を含む、全 2 部、全 9 章から構成される。

まず序章では、影響力を持った個人を利用することで標的国の世論や政策を秘密裡に誘導して自国の国益に沿う行動を取らせることを狙った政治工作（「影響力」工作）を、ソ連が両大戦間期（特に 1930 年代）から 1940 年代半ばにかけて世界各地で展開していたことを仮説として提示し、それを証明することによって、ソ連の対外革命戦略の一端を解明することが、本論文の主たる目的であることが示される。次いで、対外政治工作の一類型としての「影響力」工作は、古くから世界の戦略思想の中に散見され、さらにソ連も冷戦時代において多用しているが、これまで充分に検証されてこなかったことを指摘している。

また、本論文で用いる主な史料としては、アメリカが 1943 年から 1980 年までおこなった秘密作戦「ヴェノナ」（VENONA）によって解読されたソ連暗号通信文書、ソ連秘密警察 KGB（Комитет государственной безопасности: КГБ: 国家保安委員会）の元諜報官アレクサンドル・ヴァシリエフ（Александр Васильев）がロシア国外に持ち出した KGB 内部文書の写し、近年公開が進んでいるイギリスの主要な防諜機関 MI5 の捜査資料、「情報自由法」（Freedom of Information Act: FOIA）による開示請求によって閲覧したアメリカの主要な防諜機関 FBI（Federal Bureau of Investigation: 連邦捜査局）の捜査資料、あるいはロシアのボリシェヴィキ党やコミンテルンの関係文書を編纂した公刊史料集やアメリカ連邦議会の各種委員会議事録などがあることを示した。

第 1 部においては、ソ連の「影響力」工作を分析するための理論的な枠組みについて検討している。

第 1 章では、冷戦時代にソ連が標的国に影響を与えるためにおこなった「アクティブ・メジャーズ」（Active Measures）と呼ばれる工作形態について概観し、この工作の非公然の手法のひとつとして、「エージェント・オブ・インフルエンス」（agent of influence）なる影響力を持った協力者を用いる工作があったことを紹介している。

第 2 章は、冷戦時代における KGB の「エージェント・オブ・インフルエンス」概念について検証し、その基本的なタイプには 3 種類あることを論証している。すなわち、KGB 関係者から命令を受けて協力する者（「ウィッティング・エージェント・オブ・インフルエンス」）、KGB 関係者から直截的には命令を受けていないが暗黙のうちに協力する者（「ウィッティング・コンフィデンシャル・コンタクト・オブ・インフルエンス」、KGB 関係者であると認識しないままにその人物の命令を受けて協力する人物（「アンウィッティング・エージェント・オブ・インフルエンス」である。

第 3 章は、前章で得た知見や両大戦間期におけるソ連の情報活動のあり方や対人的な影響力についての社会心理学の諸研究などをもとにして、両大戦間期から冷戦時代にかけて

ソ連の「影響力」工作に用いられた「エージェント・オブ・インフルエンス」の要件を措定している。その際、冷戦時代に KGB が「影響力」工作において用いた協力者の基本的な 3 タイプは、冷戦期以前のソ連秘密警察はもとより、ソ連の情報機能を担ったその他の組織においても適用できるとの見方を示した。

第 4 章は、共産主義運動に何らかの形で関与した人々のタイプについて、FBI 長官を長く務めたエドガー・フーヴァー（J. Edgar Hoover）が示した 5 類型（公然の共産党員、非公然の共産党員、「フェロー・トラヴェラー」など）と新たに追加すべき 4 類型を含めた計 9 類型と、ソ連の「エージェント・オブ・インフルエンス」の基本の 3 タイプとの関係について理論的に考察している。その結果、ソ連の「エージェント・オブ・インフルエンス」は、細かく分類すると 21 種類存在すると想定されることを導き出した。

第 2 部においては、第 1 部で得た知見をもとに、ソ連の「影響力」工作について具体的に検証し、両大戦間期から 1940 年代半ばにおいてソ連の「エージェント・オブ・インフルエンス」に合致する人物が実際に存在することを証明している。

第 5 章は、孫文の妻で政治家でもある宋慶齢について検証をおこなった。1928 年春にコミンテルンにおける中国問題の専門家であったパーヴェル・ミフ（Павел Александрович Миф）らが中心となって宋慶齢を協力者として利用する計画を立てたが、同年夏にコミンテルンが極左路線に転じたため、この計画は立ち消えとなる。しかしその後、1931 年のヌーラン事件をきっかけに、宋慶齢はソ連に対して自覚的に協力するようになる。すなわち、ヌーラン夫妻救援運動や国民党による中国共産党員に対する弾圧に反対する抗議活動を組織的に展開していく中で、彼女はソ連の「ウィッティング・エージェント・オブ・インフルエンス」としての役割を果たすようになった。他方で、宋慶齢の側近として数々のフロント組織に関与したアメリカ人ジャーナリスト、アグネス・スメドレー（Agnes Smedley）も、ソ連と秘密の関係を持ち、自らの影響力を行使する「ウィッティング・エージェント・オブ・インフルエンス」であったことを示した。ただ、スメドレーは人々をつなぎ合わせて組織化していくという、いわば〝コーディネーター型〟の「エージェント・オブ・インフルエンス」であったが、宋慶齢はそのように組織化された運動の最上段に看板として据えられた、いわば〝広告塔型〟の「エージェント・オブ・インフルエンス」であったと言うことができる。

第 6 章は、ドイツ共産党員であるオットー・カッツ（Otto Katz）について検証をおこなった。カッツは、ドイツ共産党幹部のヴィリー・ミュンツェンベルク（Willi Münzenberg）の側近として、コミンテルンの国際フロント組織活動に参加した。彼はナチスを批判するプロパガンダ本の編集の他、世界各地で反ファシズム運動の組織化に邁進した。イギリスにおいて、イギリス労働党貴族院議員のマーリー卿（Dudley Leigh Aman, 1st Baron Marley）や同党下院議員のエレン・ウィルキンソン（Ellen Wilkinson）といった有力者を中心に多くの人々を反ファシズム運動に糾合した。彼は文化人としての影響力を行使する一方で、人々を結びつける高い能力によってソ連の「影響力」工作に貢献した。すなわち

カッツは、スメドレーと同様の〝コーディネーター型〟の「ウィッティング・エージェント・オブ・インフルエンス」であった。アメリカにおいても、この影響力行使の性格は発揮され、特にハリウッドにおいて大きな成功を収めた。映画監督のフリッツ・ラング（Fritz Lang）や脚本家のドナルド・オグデン・スチュアート（Donald Ogden Stewart）など多くの有名な映画関係者達を感化し、短期間で反ファシズム運動の組織化に成功したことを明らかにした。

第 7 章は、ソ連秘密警察による「影響力」工作の起源についてアメリカを例に考察した。同警察が「影響力」工作の重要性に注目したのは比較的遅く、1938 年 6 月に同警察ニューヨーク支局長ピョートル・グッツァイト（Пётр Давыдович Гутцайт）が、米連邦議会に協力者を獲得したり、自前の新聞社をアメリカで秘密裡に運営することなどを通じて、アメリカの政治に影響を与える必要を訴えたことが発端のひとつであったと見られる。結局、米議会に対する「影響力」工作の試みは失敗したが、自前の新聞社についてはアメリカ共産党を介して運用し、その際ジャーナリストのブルース・ミントン（Bruce Minton）が〝コーディネーター型〟の「エージェント・オブ・インフルエンス」としての役割を果たした。他方で、1943 年 9 月に当時のソ連秘密警察ニューヨーク支局長ヴァシーリ・ザルービン（Василий Зарубин）が米政府内に「エージェント・オブ・インフルエンス」として利用できる人材が不足していることを指摘してから、米官僚を用いた「影響力」工作を本格的に試みるようになったと見られる。その後、財務省高官のハリー・デクスター・ホワイト（Harry Dexter White）がソ連に対するドル借款問題において「ウィッティング・エージェント・オブ・インフルエンス」あるいは「ウィッティング・コンフィデンシャル・コンタクト・オブ・インフルエンス」としての役割を果たした。ホワイトはいわゆる〝スパイ活動〟から入り、財務省内で出世して影響力を行使できる地位になって「影響力」工作に携わった人物であるので、〝出世型〟の「エージェント・オブ・インフルエンス」と言える存在であることを明らかにした。

終章は、以上の成果から、ソ連が諸外国の国民や政策決定者の知覚を秘密裡に誘導してソ連の国益に沿うような行動を取らせるという戦略を両大戦間期から世界規模で用いていたと結論付けた。他方で、本論文で特定した「エージェント・オブ・インフルエンス」以外にも、多くのソ連の「エージェント・オブ・インフルエンス」が存在する可能性が高いことに留意するよう促した。また、ソ連秘密警察が政策誘導を狙う古典的な「影響力」工作を担い、コミンテルンやソ連共産党が全く新しいタイプの工作、すなわち世論誘導を狙う「影響力」工作を担うという棲み分けが見られることを指摘した。さらに、国際フロント組織の運用などの面でコミンテルンの衣鉢を継いだソ連共産党中央委員会国際部や、同部との交流を通じて「影響力」工作全般を担う中心的な組織になったソ連秘密警察のあり方などから、ソ連が両大戦間期から世界に先駆けて着手した「影響力」工作の経験が、冷戦時代における「影響力」工作の礎となって引き続き同国の国益追求の営みに活かされたと言えることを指摘した。